

中学終業式(2023年7月20日)

1つは学校事故を忘れないということです。7年前当時高校1年生のAさんは、部活動中に頭を打って救急車で搬送され、意識が戻ることなく翌朝亡くなられました。事故発生は夏休み初日7月21日午前9時半頃でした。Aさんはラグビー部の練習中、グラウンドに倒れ、後頭部を打ちました。「大丈夫か」と問いかけられた直後は、応答ができていましたが、すぐ意識が混濁し、いびきをかき始めたため救急車要請。後頭部を打ってから10分以内に顧問はAEDを準備し、気道確保をして、脈と呼吸を確認し救急隊の到着を待ちました。病院に搬送され緊急手術を受けましたが翌朝死亡という事故でした。医師の診断は急性硬膜下血腫でした。

本校ではAさんの命日にあたる7月22日を「いのちの日」としました。生命はあっという間に消えてしまいます。Aさんは、朝「いってきます」と元気に学校に出かけ、学校から病院に運ばれたとき、家に帰ることができませんでした。Aさんは人の心の中でしか生きていくすべがなく、その時からご家族の時間は止まったままで、お辛い日々を過ごされました。学校は預かった生徒さんを、卒業時、預かった時の姿のままで家庭へ必ず返さなければなりません。

2つめは異変を知らせる大切さです。Aさんご家族は二度と同様の事故を起こしてほしくない一心に願っておられます。かつて「スポーツにケガはつきもの」という考え方がありましたが、現代は「小さなケガから再発防止を学び、同じケガを二度と出さないという断固とした姿勢が必要です。教え子に重大な後遺障害を残したり死亡させたりした場合、指導者の罪悪感や心の傷も一生消えることはありません。「休みを言いづらい」「休憩したいと言いつけない」「部を辞めると言いづらい」これらは重大事故が起こってしまった部活動に共通して生徒が言った言葉です。私たち教員は生徒の未熟さを考え言いやすい環境をつくりたい。「不安な時には、しばらく休養を」これが頭部外傷予防に一番有効な方法です。ケガをした、具合が悪くなった、しんどい、などどんな些細なことでも家族や指導者に報告してください。夏休みは熱中症ガイドライン・予防策の理解を深め、疲れる前に休む体制をとってください。無理な計画は事故のもとです。命より大事な仕事や活動はありません。スポーツは危険を伴います。どうしたら安全に楽しめるか考え合ひましょう。

3つめは心と体を上手に休ませ、相談することです。睡眠と食欲の低下など疲労のサインに気づいたら誰かに伝えてください。私達大人も心の余裕を作って、子どもたちの気持ちを聴いてあげられる存在になれるよう努めます。以上、事故を忘れない、異変を知らせる、心と体を休ませ相談する、の3つお話ししました。

最後に、本校事故から7年目の夏を迎え決意を述べます。いまなお戦争が続き、子どもや弱い立場の人が生きづらい世の中です。どの生徒も学校内や学校の外に居場所があり、安心して過ごせる温かい土壌を大切にしましょう。このことが中庭にある追悼の碑に刻まれています。大切なのは対話の力で、生徒1人ひとりの命、人生を重く見ることです。亡くなられたAさんの御霊に心から哀悼の誠を捧げ、私たち本校構成員は、子どもの最善の利益を守る

ため、力を尽くし続けることをここに誓います。Aさんを思い、ここで黙とうを捧げたいと思います。 一黙とう— お直りください。以上でお話を終わります。